

づけるのか。探検隊は調査するが、一向にわからない。そして、恐ろしい事件の勃発。夜になると怪物が現われて隊員を一人一人丸呑みにするのだ。朝になると怪物は姿を消す。どこを探してもみつからない。不思議なことに、その巨大の足跡は生物学的進化の過程がない動物のものだった。果たしてその怪物の正体は。ついに探検隊はその謎を解く。地下の巨大な工場。それは、科学文明の極致。思考さえ具現化できるコンピュータ装置だったのである。何でも、夢さえも叶えてしまうドラえもんのポケットだったのだ。限りなく創造主に近くなったコンピュータ。だが、その「神の機械」も「中枢神経のねじれた人間の煩悶とか怨念とかには未来永劫にわたって音痴」だった。ほんの些細な憎しみや嫉み。その人間

の闇が悪夢となって脳に浮かんだとき、地下工場は一齐にその無意識を具現化するためにフル回転する。かくて悪夢は一匹の形而下された怪物と化して次々隊員たちを襲った。この美しい星の住人は「神の機械」を手に入れたその日から互いの悪夢の怪物に襲われ、次々と消えていったのだ。そして、誰もいなくなった。そのすばらしい「神の機械」を地球に持ちかえるべきか否か。議論するが、彼らは爆破して星を去る。

H. ハミルトンの「フエツセンデンの宇宙」も忘れがたい短篇である。科学者フエツセンデンは自分の研究室の中に小宇宙を創ることに成功した。神となった彼は、意のままに宇宙を操る。見学させてもらった私は、空間に浮かぶ星々のなかに、あの「夢み男」がみたような美しい惑星を発見す

る。汚れを知らない人々が暮らしている。博士の心に残酷な思いが浮かぶ。「このエデンの星に悪しき星を近づけたらどうなるか」私は博士の考えを知って、その実験を阻止しようとする。争っているうちに博士は誤って自らの宇宙に落ちてしまった。そして、無。

ドストエフスキーをハツカーとしてとらえたとき、SFものが見事なまでに、その啓示を証明していることがわかる。このようにSFの分野においてもドストエフスキーは他者を追隨させぬほどの偉大さをみせている。

長瀬 隆著『微笑の沈黙』（晩聲社）を
読む

たしか七年ほど前、ロシアの批評家ベレヴェルゼフが書いた『ドストエフスキーの創造（二重人格と革命）』を読んだ。そのとき、この本の最後に収録されていた「ドストエフスキーと革命」に感動した。一九二二年、モスクワで行なわれたドストエフスキー生誕百年祭の記念集会で講演されたものである。ロシア革命が起きてから数年、革命という新しい世界創造の息吹の中で、いま一度『悪霊』の考察を訴え、革命に警鐘を打ち鳴らすその内容に衝撃をうけた。当時、こんな文芸批評家がいたのか。ベレヴェルゼフと翻訳者の名前は、強く記憶に残った。あとがきの「訳者の解説と後記」も、大いに興味をひくものだった。

驚いたことに本論は当初、ベレヴェルゼ

アの論文とは知られていなかったようだ。ある教授の追悼文集にあった論文を訳者が調査、研究した結果、本論はベレヴェルゼアの論文に相違ないと確信し、今は亡き新谷敬三郎先生に相談して改めて「二人でそうであることを確認した」ものであるという。こうした契機を顧みると本訳書『ドストエフスキーの創造』は、いかに訳者ひとりの熱意と執念の賜であったかがわかる。追記として訳者が、今後の発表の場として「ドストエフスキーの会」も紹介しているのもうれしかった。それだけに論文の訳者・長瀬隆氏の名前は、脳裏にしつかりと焼きついていた。

本書は、その訳者・長瀬隆氏の自伝的ともいえる小説である。同時に『ドストエフスキーの創造』翻訳に至るまでの長い苦闘

た時代や学んだ知識によって、思いは様々だろう。ある人にとってはなつかしく、またある人にとっては思い出したくもない忌まわしい土地。チエーホフが旅したところ。覚めぬロマンチストなら女優岡田嘉子が杉本良吉と手に手をとって越えた愛の国境線。樺太は幻想的な印象さえる。

北村高志の樺太は、異国となった故郷。ロシア人と暮らした日々。学友たちからのいじめ。少年時代の思い出は、なつかしくもほろ苦い。だが、それでも彼の樺太は、神聖にして侵さざる場所だった。なぜなら、かの地は北村自身でもあったからだ。樺太を書くことは、自分自身の存在を確かめること。そのために彼は、樺太に向かって歩きだした。しかし、樺太への道程は遠く、困難な旅だった。

の軌跡でもある。

九七年は、神戸で起きた衝撃的な小学生殺人事件から、十四歳という年齢が目撃された。だれにとつても思春期は忘れがたい。本書は、十四歳での体験が「人生のすべてを決定してしまつて、その後に変化することが不可能になつてしまった人間」を描いた物語である。

主人公の北村高志は、樺太で生まれ育つた。中学生のとき敗戦を迎えた。彼は本土への引き揚げが決まつたとき、遠溥の村を訪れた。帰り道、峠に立つて振り返つて故郷を眺めた。二度と見ることはないであろう風景。それは多感な少年の心に強く焼きついた。その瞬間、彼は「樺太を書くこと」を人生の目標に掲げた。

主人公の心を捉えた樺太とは何か。育つ

それはまた運命的な出会いと回り道の連続だった。

「であろう」とする不確かな結び。反芻する思い出。迷いと後悔に満ちた語り。物語は、まるで出口のない迷路をさまようようなもどかしさがある。が、行きつ戻りつ進む展開と故郷・樺太への回帰本能は、一種ミステリアスな思いを抱かせ、引きつけて離さないところがある。

北村は樺太への道のはじまりとして、まず大学の露文科でロシア語を学ぶ。このときの入学の経緯や、その後、入党したある政治団体に関する出来事。登場する人物などは、当時を知るものにとつて大いに興味深いところである。終戦時の日本の知識人がソ連の社会主義をどうとらえていたかがよくわかる。

そのなかにあつて恩師の教授については、謎の部分が多い。この四十九才で夭折した恩師は、かつてはドストエフスキー研究者であつた。が、戦後、人民党（共産党）に入党し「マルクス主義の啓蒙宣伝活動に精力的に働いた」人物となつている。ドストエフスキーからマルクスに転じた動機は戦争中の学徒出陣にあるようだが、スターリンを称賛し、ソ連を肯定、粛清を不問に付したのはなぜか。教授の答は常に微笑の沈黙だつた。

その沈黙が北村の運命の車輪を、新たな微笑の沈黙に向けて動きださせた。「ベレグアーロフ（ベレグエルゼフ）についてせめて一言でも伝達して逝つたならば」北村の人生は、違つたものになつてゐた。が、彼は悔いてはゐなかつた。被爆者である道子

老眼になつたせい、それとも体力減退で根気がなくなつたせい、か近ごろ小説を読まなくなつた。なかでも現代文学は、ほとんど読むことがなかつた。そんなわけで佐藤洋二郎という作家についても、友人の清水正氏に教えていただくまで全く知らなかつたという体たらくなのである。それだけに、現代文学について、たとへ感想であつても語るということは何か気が引けるものがある。何十年ぶりに野球観戦して、知つた顔であれこれ講釈するやうなもので、失礼極まりない話である。まずは、お詫び申し上げるしかない。もつとも佐藤洋二郎の存在と、この作品を読むきっかけをつくつてくださった清水正氏には、あらためてお礼申し上げたい。

さて、本題に入るとしよう。私は、この作

との結婚。

「樺太のヒロシマの子」と呼んだわが子の死。微笑の沈黙からはじまつた北村の人生の行く手には、呼べども答えぬツヨシの微笑の沈黙が待つてゐた。樺太への試練はつづく。妻・道子の病氣発生。看病に疲れて「早く死ねよ」と妻を打つ北村。ヒロシマを書くはずが、樺太を書くはずが、痛ましい家族の肖像。

だがしかし、読み終えた後に静かにひろがる感動。この物語のモチーフが癒しと再生にあることを知るのである。

佐藤洋二郎著『夏至祭』（講談社文庫）に寄せて

——なぜ清水正氏は『夏至祭』に魅せられたか——

品『夏至祭』を大きな謎を抱えて読むことになつた。ふつう謎というものは対象物を直接に見るか、読むか、聞くかしてはじめて生じるものである。が、このたびに限り謎は先にきた。それゆゑに、本拙文は感想や評論というより、なんとなく謎解きの形となつてしまつた。あしからず。

それでは私が抱えることになつた謎とは何か。まずは、そのことから明らかにしてゆきたい。それには、この作品を知ることになつた経験を少しばかり話しておく必要がある。そのことが謎解きには重要なカギとなるかも知れないからだ。

私が、佐藤洋二郎という作家を清水正氏から教えていただいたのは、たしか、風まだ冷たい春先のことだつた。氏からの電話でだつた。

もつとも空想は自由であって、だれもそれを妨げることはできない。しかしそれは現存するものの正確な読解の後になされるべきことである。亀山郁夫は「大審問官」に登場するキリストを偽キリストと、またスメルジャコフを下男グリゴリーの実子などと妄想誤読誤訳する精神病患者であり、そうした者が語る「続編」などは何の価値も無く、ドストエフスキーを貶める以外の何ものではない。

私のドスト把握は私自身が記者であるペレヴェルゼフ『ドストエフスキーの創造』(みすず書房、1989)に深く負っている。しかし『ドストエフスキーとは何か』770枚(成文社、2008年7月刊)ではこれを大幅に超えており、詳しくはこれに見られたい。またこの公刊に先立つ『江古田文学』07年66号の「ドヴォイニーク(二重人、分身)と作中作家」および『広場』08年17号の「唯一絶対神有無の文学」は、この書の角度を変えた要約をなす。刊行後の『ドストエフスキー曼荼羅』2号の「遅れた到着」も参考になろう。

拙HPに「亀山郁夫を批判する(1)、(2)」を掲載してある。ドストエフスキーの会のHPの「管理者木下のページ」からも入ることができる。

また私には作品に『樺太よ遠く孤独な』(1984)、『ヒロシマまでの長い道』(1989)、『微笑の沈黙』(1985)、学的評論に『日露領土紛争の根源』(2003)等がある。同じくHPを覗いていただきたい。<http://homepage2.nifty.com/~t-nagase/>

長瀬隆著『ヒロシマまでの長い道』とドヴォイニーク

ドヴォイニーク(分身、二重人)へのこだわり。長瀬氏を知る人なら、氏が、いかにドヴォイニークという怪物と闘ってきたのか、いま現在も闘いつづけているのかを知っている。

しかし、何故に氏はドヴォイニークと対峙しつづけるのか。何故に、かくも長きにわたって拘泥し探究しつづけるのか。「ドヴォイニーク」の言葉を発したときの氏は、あきらかにそれまでの氏とは異なる。俄然、生き生きとして語りだす。何故か。大きな謎であった。

これまでの氏の自伝的著書を何冊か読んできた。おもえばそれら作品のそこかしこにドヴォイニークはいたのだ。が、浅薄な読みのせいで気づくことはなかった。

しかし、今回、本書『ヒロシマまでの長い道』を読んで、ようやくというか、やっとドヴォイニークの尻尾を目撃することができたような、そんな気がするのである。

もしかして大いなる間違い。勝手な思い込み、かも知れないが……。とたん、謎は氷解した。氏がなぜドヴォイニークに拘るのか想像の域だが推測できたのである。

本書は、数奇な運命の果てに巡りあった男と女のある愛の物語である。男は、全学連を代表する若きマルクス・レーニン主義者の闘士として、女は、ヒロシマ被爆者を代表する美しい語り部としてソ連モスクワで開かれる大会に向かっていた。男は、ソ連留学という使命が、女には、ヒロシマの悲惨さを伝えるという使命があった。美しい女は、団では女神的存在だった。男は共産主義理念思想に凝固まった活動家とみられていた。鋼鉄の刃と造花の花。いわば二人は、象徴であった。だがしかし、彼らのなかには懐疑の嵐と熱い血潮が渦巻いていた。それがわかったとき、二人はもはやエデンの園の男と女ではいられなかった。

本書は、楽園からの脱出物語である。が、同時に、男の引き裂かれた魂の告白でもある。ドヴォイニークを白日に曝そうとする試み。男は、樺太で生まれ育った。が、戦争で決別を余儀なくされた。愛するロシア、忌むべきスターリン。加えて、樺太を去る日、友人たちから受けた集団暴行。14歳の少年には深いトラウマとなった。懐かしい故郷、憎むべき友たち。男は、その日から二重人としての人生を歩むことになった。愛する妻の病氣、幼くして逝ったわが子。それらはみな分身が成せる災いか。男は夜の沈黙に問う。(編集室)

下原 隆
〇〇年〇月